
魔法少女とかマジ笑える

二足歩行犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女とかマジ笑える

【Nコード】

N0912Z

【作者名】

二足歩行犬

【あらすじ】

リリカルな世界に転生した少年の物語。

能力は貰えなかったが、精一杯生きています。今、中学2年生の春が始まる！！

プロローグ（前書き）

どうも、二足歩行犬です。

かなりgood goodな感じですが、どうか温かい目で見てやってください。

感想をくれると、夕食のおかずが一品増えます。

プロローグ

4月。

まだ寒気が残るが、徐々に暖かさを感じるようになる季節。そして、始まりの季節。

入学、就職、新学期、留年（笑）。

そんな始まりのイベントが、もちろん俺にもある。

西野音耶、中学二年生になりました！！

あっ、あと転生者です。

（13年前）

「知らない天井……が、ないだと……!？」

やってくれるな、俺を嵌めるなんて。

まさか天井がないとは。

で、ここどこだ？

「ふぉ、起きたようじゃの」

死んだじーちゃんに良く似た声でした。
おいおいっ！やめてくれよじーちゃん！！
俺が幽霊嫌いなもの知ってんだろ！？

下半身のダムが崩壊しそうなのを我慢して、恐る恐る振り向くと、
そこには良く見知った人がいた。

「あ、あんたは！？」

「ふおおおお、そうじゃ。わしはk「山本元柳斎重國！！」万象
一切灰じ、って違うわ！！！！」

ノリのいい老いぼれだった。

「で？あんただれよ？」

「神じゃ」

「へー」

「……それだけかの？」

いや、これ転生つてやつだろ？
二次創作でよく見る展開だし。
だから神が出て、特に何も。

「なんじゃ、つまらんのぉ」

頬を膨らませてブーブー言ってくる。
うはっ、きめえ！！

「で、能力は何くれんの？転生先は？」

「転生先は『魔法少女リリカルなのは』の世界じゃ」

ああ魔王ね。

んで、能力は？

「やらん」

「What?」

「だから、能力はやらん」

なに言ってるのこいつ？

俺に桃色バスターを生身で受け止めると？

「じゃあ原作介入は？」

「しなければ良からうが」

「それじゃ転生の意味なくね？」

「そっじゃの」

え？こいつ何なの？アホなの？死ぬの？

「まったく、うるさいやつじゃのお。いいか？わしだって能力をやりたい。しかしな、能力を授けると……減るんじゃ……」

減る？なにが？寿命か？

「髪じゃ」

「よし、つるつるになるまで能力寄せ」

「嫌じゃー!」

「アンタの髪の毛だって、もう疲れたんだ!ー!楽にしてやれ!ー!」

「毛は我と共にあり」

「お前も帰れ」

「いや、お主が帰れ」

「いやいや俺死んで、ツなんだこれ!？」

足元から黒い何かが、徐々に俺を包んでいく。

「一応、魔導師の子供になるようにしといたからの。感謝するんじやぞ」

「あつ、ちよつ、アーーーーーッ」

黒いものに全身を包まれた俺の意識は、そこでブラックアウトした。

「ふむ、やっぱり能力をやっても良かったかのお。……いや、あや

つにまでやるとわしの髪の毛がなくなるか」

「さで、あやつら3人がどのような物語を見せてくれるか楽しみ
「や

第1話 俺の家族。妹はマジ天使（前書き）

聖祥は男女一緒にしました。

何か誤字がありましたら、お教えください。

今日のうちに、あと一話いけるかな？

第1話 俺の家族。妹はマジ天使

現在、午後7時。

枕元に置いた目覚まし時計が、不快になるほど電子音を鳴らしている。

けど俺は起きない。

いや、実際起きているのだが寝たフリをする。

否！！しなければならぬのだ。

その時、扉をノックする音がした。

「……おにいちゃん？」

聞こえてくるのは、甘いロリボイス。

憎き早朝を清清しい朝に変えてくれるAngel voice。

しかしまだ起きない。

「入るよ？……起きて。学校遅れる」

そう言つて俺を揺さぶる。

仕方ない、起きるか。

泣かれても困るしな。

「んっ……おはよう、雪音」

「おはよう」

ニコニコしながら挨拶を交わすMy Angel。

あまりの可愛さに撫でてやると、気持ち良さそうに目を細めた。

朝から俺を殺す気ですか？

「おにいちゃん、お腹すいた」

「ああ、今作るから待ってな」

そう言っつて雪音に先に降りてもらおう。

俺は制服に着替えると、朝食を作るためリビングへ向かった。

「おっす、兄貴ー!!」

「朝からうるせー」

「兄貴が、テンション、低いだけだよ!!」

リビングで朝っぱらから逆立ち腕立て伏せをしているこいつは、弟の紫音。

別名、イガグリ紫音。

坊主頭の熱血男子だ。

坊主なのに紫音。

坊主なのに紫音。

大事なことなので二回言った。

「紫音、シャワー浴びとけよ」

「えー、めんどくせー」

「モテないぞ？」

「なんか無性にシャワー浴びたくなつた!!!」

風呂場に向かって走って走って行く紫音。

ふっ、単純な奴だ。

「おにいちゃん、ご飯」

クイクイツと服を掴む雪音。

雪音は俺の妹で、紫音の姉。

黒いツインテールが可愛さを倍増させている。

基本、俺と紫音と両親以外には口数の少ない女の子。

しかし、それがいい…。

ちなみに両親は管理局員をしているため、家には不在。

なので、俺たち3人で家庭を切り盛りしている。

まあ、主に俺だけだけど。

「雪音は何が食べたい？」

「…パン」

「じゃあ、パンと目玉焼きとサラダでいいか」

俺は裾を掴む雪音に名残惜しいが離れてもらい、キッチンへと向かった。

「……いただきます」「」

朝食を作り終え、3人で食卓を囲む。

「兄貴、最近たるんでない？」

「いきなり何を言うか、イガグリ」

「イガグリじゃねえよ！！坊主だよ！！」

「で？何がたるんでるって？」

「修行だよ修行！！」

あー、確かに最近やってないかも。
時間もあんまり取れなかったし。

「まあ、俺は家族を守ればそれでいいからな」

「……わたし、守ってくれるの？」

「ああ、頼りないかもだけど、母さんと雪音は俺が守るよ」

「……あれ？俺と父さんは？」

「野郎は知らん」

ガツクリしているイガグリを放っておいて、向かいに座る雪音を撫

でようとしたが……出来なかった。

原因はコイツ。

西野家名物、食パンタワー。

見上げるほどの食パンが、俺と雪音の間の壁となっている。

お陰で人形のような雪音フェイスが見えない。

ああ忌々しい。

「しかし、姉ちゃんは良く食べるよな」

「…食べるの、好き」

「俺は雪音の食べる姿が好き」

「……兄貴って本当に姉ちゃんが好きだよな」

「ああ、もう胸が満腹だ……」

「」「」「……いってきます(?!?!)」

「おう、いってらっしゃい。あ、イガグリ、雪音の弁当落とすなよ」

「これくらい大丈夫だって!!」

そう言うイガグリの手には重箱2つ。

どちらも雪音の分だ。

雪音はかなり食べるのに非力なので、弁当持ちはコイツの仕事。

ちなみに2人は小6と小5です。

学校は私立聖祥大付属学校小学校。

俺はその中学2年。来年は雪音が上がってくる。
考えただけでも涎が出そうだ。

さて、俺も支度をして行くかな。

第1話 俺の家族。妹はマジ天使（後書き）

出ました、西野ファミリー！！

読みは…

音耶 おとや
音 ゆき
雪音 ゆきね
紫音 しおん

です。

紫音とか絶対に付けられたくないですよね？
俺だったらグれます。

第2話 新クラス。魔王はマジやばい（前書き）

今日で3話。

頑張った俺。

そんな俺には一品おかずが増えます。

ガーリックトースト

神の作りし聖なる食物。

美味でした。

第2話 新クラス。魔王はマジやばい

着きました中学校。

え？展開が早い？だって登校しただけだよ？

まあそんなこんなで、俺は掲示板の前にいる。
目的は新クラスを確認するためだ。

さてと、まずは2 - Aから…

秋本…

川井…

立川…

内藤…

ぬこ…

…ないか。B組は…

あああ…

E口…

鬼山…

クレス…

屍人…

豚々…

ぬこ360…

…突っ込まんぞ。Cは…

アリサ…

海堂…

高町…

月村…

西野…

フェイト…

八神…

ふむ、どうやらC組のようだ。

しかしなんだ、原作キャラ纏められているな。

まあ、関わらなければいいだけだ。

桃色バスター喰らいたくねえし。

で、着きました教室。

知ってる奴いないな。まあ、元から友達なんていないけどね、ハハハ。

俺は広く浅くの関係を望んでいるのだよ、ワトソン君。

今、水深0メートルくらいだ。

あ、原作キャラもまだ着てないようだ。

俺はMYデスクの場所を確認して席に着いた。

場所は窓側の一番後ろから二番目。まあまあなポディション。

俺は席に着き、鞆からある物を取り出した。

ふむ、朝はこれがないと。

くなのはside

今日から新学年！！

わたしは新しい出会いを楽しみにしながら、通学路を歩いていた。

「おーい、なのはっ」

「あ、アリサちゃん！！」

「おはよう、なのはちゃん」

「アリサちゃんとすずかちゃん、おはよう」

「おはよ。それにしてもなのは、なんか楽しそうね」

「うん、だって新しいクラスだよ？楽しみに決まってるよ！」

「いっしょのクラスになれるといいね」

「うん！！」

わたしは親友のアリサちゃん、すずかちゃんと共に学校へ向かいました。

「なのはっ」

「みんな、おはよっ」

「フェイトちゃん、はやてちゃん」

学校に着くと、校門前にフェイトちゃんとはやてちゃんがいました。どうやら、わたし達を待っていてくれたみたいなの。

「さて、クラス分けを見にいきましょう」

アリサちゃんの一声で、私達は学校の掲示板へと向かいました。

「うわっ、人が多いわね…」

「しょうがないよ、新学期なんだし」

掲示板前の人ごみを見て、アリサちゃんは凄く嫌そうな顔をしました。

わたしもあの中に突入する勇氣はないの…。

「おっす、みんな」

と、わたし達が困っていると人ごみから1人の男の子が近づいてきました。

「海斗くん、おはよう」

「おはっ、今日もええ髪しとるのお、すずか嬢」

「あんた、すずかを口説いてんじゃないわよ!」

「ツンデレええわあ、君のデレを見せてくれないか（キリッ）」
「きもっ！！」

「口の端がにやけとるよ、海斗君」

「はやて嬢か、……特になし」

「あ、ちよつとカチンときたわ」

「は、はやて、抑えて抑えて」

「フェイト嬢、結婚してください！！」

「ええええええええ！？」

「フェイトを困らせんじやないわよ」「ドゴッ！！」

「ぐはあ！！」

アリスちゃんに殴られた海斗君は、きれいに半円を描いて吹っ飛んだの。

痛そお。アリスちゃんも手加減しないなあ。

「大丈夫、海斗君？」

「…な…なのは嬢…すまんのお…」

海斗君は差し出した手に掴まり、なんとか起き上がりました。海斗君は生まれたての子鹿のように、足をプルプルさせてる。

わ、笑っちゃ駄目っ、耐えないとっ。

「……なのは嬢」

「なっ、なにっ？」

柔らかな顔でわたしを見つめてくる海斗君。けど下を見ると、足がプルプルしてるのっ。

「ありがとう、なのは嬢（ニコッ）」

ゴッ……！！！！

「……………あっ……………」

何故か私の拳が、前に突き出されていました。

「……なのは嬢、ジムに通ってみる気はないか？」

「うう、ごめんなさい」

あの後、復活した海斗君の額には大きな青あざが出来ていました。

「でもねっ、なんか海斗君の笑顔を見ると手が勝手に……」

「……………わかる……………」

「全員同意！？まあええけどさ」

「そんなことより、クラス分け見に行かない？」

「……フェイト嬢って、偶にワシの扱いがひどい」

しょうがないよ、海斗君だもん。

わたし達が掲示板の前に移動しようとする、今度は別の男の子が
駆け寄ってきました。

「おはよう、なのは（ニコッ）」

「あ、うん、おはよう」

来たのはクレス君。

キレイな金髪と中世的な顔立ち。

向けてきた笑顔は、なんだか絵になります。
けど、わたしは何故か寒気を感じました。

「なのは、今年は違うクラスだね……」

「やっ……！」

「やっ？どうしたの、なのは？」

「や、やだね？べ、別のクラスなんて」

「そっだね……」

危ないの…。

思わず喜びそうになっちゃった。

クレス君は寂しそうだけど、わたしはちょっと嬉しい。だって、クレス君ってちょっと苦手だから。

「でも、なのはは他の皆と一緒にだから安全だね。僕も昼休みとかはC組に行くから」

「え……。あッ！？うん是非！！」

昼休みも来る気なの…。

と、わたしが気落ちしていると、海斗君がクレス君に声をかけました。

「あんさん、ワシは何組やった？」

「なのは、何かあったら呼んでね？直ぐに駆けつけるから」

「あ、うん」

「なあなあ、だからワs「それじゃあ、そろそろ行くね？また後で」

クレス君はそう言って、校舎へと歩いていった。

無視されていた海斗君は、へらへらしながら「もう慣れたわ」と言っている。

海斗君かわいそうなの。

そういうところが苦手なんだよ？クレス君。

「ほんま空気読めへんな、クレス君は」

わたし達はクラス分けを見に行かず、教室へ向かった。

海斗君はクラス分けを見に行くらしい。

わたし達が確認しに行かないのは、単にネタバレされたから。

はやてちゃんも不満みたいなの。

他の皆も不満そうな顔をしている。

そっだよ。クラス分け確認するのも楽しみだったんだもんね。

「で、でも、またみんな同じクラスでよかったよ!」

場の空気に耐えられなかったのか、フェイトちゃんがわたし達に言った。

「そっだね、みんな1年間よろしくね」

「そっね、こんな空気じゃやってられないわ。みんな、またよろしく」

「よろしゅうなあ」

「うん、また楽しい1年になるよ、きつと!」

私達は新たな1年に期待を寄せて、教室へと向かった。

教室に着くと、みんな自分の席を確認して席に着く。

わたしの席は窓側2列目の、後ろから2番目。

斜め後ろ、窓側最後尾には海斗君の名前があった。

同じクラスなんだ、海斗君。

他の皆は少し席が離れている。

わたしは自分の席に着くと、隣に目をやった。

どうやら隣は男の子ようだ。

席表には西野って書いてあったから、西野君か。

隣の席なんだし、仲良くなれるといいな。

わたしは西野君に話しかけようとしたが、一瞬踏みとどまる。

理由は、西野君の真剣な表情。

西野君は手に持ったファイルを真剣に見つめていた。

勉強かな？真面目なのかもしれないの、西野君は。

でも『極秘ファイル』って、なんなのかな？

知られちゃいけない勉強？

うう、気になるう。

わたしは意を決して話掛けようとするが、またもや踏みとどまる。

というよりは、絶句して固まった。

だって、西野君の頬に一筋の涙が出来ていたから。

なんで泣いてるの!?

ううう、内容が凄く気になるの!!

「あ、あの!!西野君!!」

「……………」

あ、あれ？もしかして無視された？
いや、きつと集中して聞こえなかっただけなの！！

「西野君！！」

「……………」

ま、また！？

む、無視するなんて酷いの！！

「に、西野君！！」

わたしはお話するために、西野君が持っているファイルを取ろうと
した。

そうすれば、話してくれるかもしれないから。

そして、ファイルに手が触れそうになった瞬間…

「触るな小僧ッ！！！！！！！！！！」

「にゃっ！！！？？」

突然、大きな声を発した西野君に驚き、わたしは尻餅をついてしま
った。

な、なんなの！？突然！？

「小僧…貴様は罪を犯そうとした…」

「わ、わたし、小僧じゃな」だまらっしやいッ！！」「ひい！！！！」

まるで、幽鬼のように立ち上がる西野君。
わたしは恐怖のあまり動けなくなっていた。

「これはなあ、貴様のような薄汚れた小僧が触れていいものではない！……！言わば聖典なのだッ！……！」

「よ、汚れてないもん！毎日お風呂入ってるもん！……！」

「身体ではない……心だッ！……！」

「こ、心！？よ、汚れてないよ！？……たぶん」

「汚れてるねッ……風呂のタイルのカビくらい……！」

「カ、カビ！？」

「ああ、そうだ。お前の心は根が深い汚れなんだ。落とせないくらい深いな」

「わ、わたしは汚れてなんか……」

「いやッ、汚れてるね。人の持ち物に無断で触るとか、汚れている証拠。しかも人が見ている最中に」

「そ、それは西野君が……」

西野君が気づいてくれないからだよ……。

「仕舞いには人のせいかとことん汚れてるな、お前」

「よ…よ…れてないよお…」

「いや、きつとお前の心は茶色だ」

「き…汚なく…ない…」

なんでだろう、すつごく苦しいの…。

なんでわたしがここまで言われなくちゃ…。

「汚い。そして席に着け。なんか目立ってる」

「きつ…グス…たなく…んっ…ないよお…グズツ…」

「ちよつ、泣くとか。しかし俺は動じない。きつと俺の心は鋼で出来ていた。そして去れ小僧、…いや、タイルの汚れ」

「ふえっ、ふええええええん!!」

〈side out〉

なんか、目の前の女が泣き出した。

お前が悪いのに何故泣く？理解不能だ。

つて、良く見ればコイツ高町なのはじゃん…。

俺は原作キャラを泣かしたのか？

やべえ、チートなしで勝てたよ。

「あんだ、なのはに何したのよ!!!!」

ここで現れるお仲間達。

全員、俺に敵意の視線を向ける。

って、なんか男混じってね？

こんな奴、原作にいたっけ？

「なのは！？大丈夫！？」

「ふえ、フエイトちゃん…」

「お前、なのはは何をしたッ！！！」

今にも掴みかかってきそうな金髪ちゃん。

あれ？なんで俺が悪い事になってんの？

「俺は悪くない。勝手に泣いたのもそれだ」

「ちょお〜まで、女の子をそれ呼ばわりか？」

「それ、悪人」

俺は高町を指差す。

だって本当だよ？

俺、悪くない。

「悪人って！？だから、なのはが何したって言うのよ…！」

「ちょお落ち着き、アリサちゃん」

狸がどうにかアリサをなだめている。

「で、なのはちゃんが何したって？」

狸は静かに訊いて来るが、絶対切れてる。だって目が据わってるもん。

「そつだな…よし、その男子」

「なんや？」

「お前の大事なもんは何だ？」

「そら、エロ本や」

「エロ本か…やるなお前…。じゃあ、もしエロ本を見ている時に母親が入ってきて、エロ本を強奪したら？」

「切れる」

「だろ？こいつはそれをやろうとした」

「なッ！？ア、アンタが朝からそんな物、読んてるからいけないんじゃない！！」

「エロ本がそんな物とはなんじゃ！！」

「海斗君…少し黙ってよう？」

「あ……」「ごめんなさい……」

「工口本は例えだ。つまり大事な物を取られそうになった。説教したら泣いた。お前から登場」

「え？大事な物取ろうとしたって本当なんか？なのはちゃん」

「べ、別に取るうとはしてないよ？ただ、お話がしたくて…」

「話がしたいから強行手段か？どこの魔王だお前は？」

「なのは……」

フェイトを見ると、ちよつと引いてた。

苦労したんだな、お前。

「とりあえず俺は悪くない」

「まあ、確かに悪いのはなのはちゃんやな。そこは勘違いしとった、ごめんな」

「まあ、分かればいいんだけど」

「因みに大事な物ってなんや？」

さすが狸。さりげなく探ろうとしている。

くだらない物だったら、アリサ辺りが逆切れするんだろうな。仕方ない、俺の平穩のためだ…。

ごめん、俺の宝物……お前を…人の目にさらす。

「……これだよ」

「『極秘ファイル』？なんやこれ？……ああ、言わんといていいわ。大体予想ついたわ」

「なっ！？あんたやっぱり！！」

「勘違いするな。中身はこれだ」

俺は極秘ファイルを奴らに見えるように開く。
中身は…

「絵？」

そう、中身は雪音が小さい時に書いてくれた、数々の俺の絵だ。
うまいとは言えないが、一枚一枚に愛を感じる。
これを見て、雪音に会えない時間を耐え抜く。
言わば俺にとっての強壮薬。
金には替えられない俺の宝物だ。

「これはな…昔、妹が書いてくれた絵なんだ…」

脳裏に浮かぶのは、雪音が小さい時に記憶。
まったく…気づいたらあんなに成長してやがって…。
兄ちゃんは嬉し悲しいぞ…。

俺は後に思う。

あの時の俺はどんな顔をしていたんだろう。

「……そっか。なんかごめんな…」

「いや、俺も言い過ぎたかも」

「はやて…。あたしも悪かったわ、ごめんなさい」

「気にすんな」

「わたしもごめんね。大切な物なんだね、それ」

「ああ、宝物だ」

「すまんかった、ワシも疑ってたわ」

「過ぎた事だ。エロ本で手を打ってやる」

「その…ごめん、疑ったりして。私も気持ちはよく分かるよ…」

お前妹いたっけ？姉さんじゃないの？

あ、シスコンってことか。

「ありがとう、君とは仲良くなれる気がする。良かったら、今度話をしよう」

まさかフェイトが妹の良さについて分かるとは…。

いや、お前は姉か。

「え…う、うん…！」

さて、最後は…。

高町を見ると、顔を青くして今にも泣きそうだった。やっとお前も、この聖典の神聖さに気づいたか。

「わ、わたし…そんな大切な物を…ほ、本当にごめんなさい…」
しかしまあ、謝られて許さない俺じゃない。
汝の罪、我が許そう。

「いいよ。俺も言い過ぎたしごめんな」

「…許してくれるの？」

「ああ、話がしたいのならいくらでも話してやる」

「…ありがとう。西野君のこと誤解してた…」

誤解？はて、なんのことだ？

「あの、西野君。その…良かったらお友達になってくれるかな？」

「だが断る」

「…え？」

魔王と友達とか一寸先は闇。むしろ地獄。
俺を墮とすつもりだろ。
騙されんぞ、ブルータス。

第2話 新クラス。魔王はマジやばい（後書き）

出ました!!

原作キャラと転生者2人。

補足ですが、ニコゴッ!!について。

海堂海斗の能力。

相手の目を見てマジで微笑むと、鉄拳が飛んできます。

海斗は常に笑っています、あくまでニコニコではなく、へらへらしているだけです。

なので、普段は発動されません

第3話 昼食。マジモんの厨二患者だ（前書き）

疲れた…。

眠いお。

けど、仕上げた。

僕頑張った。

第3話 昼食。マジモんの厨二患者だ

朝の事件。

強奪未遂犯が身内の弁護士を騙し、見方に引き入れた事件。被害者までも仲間にしようとしたが、それを阻止。

しかし被告人は女の武器を行使し、被害者は嫌々友好関係を気づいた。

なお、この事件をMYKK（魔王はやっぱり心が汚かった）事件と名づける。

そして、現在昼休み。

俺は魔王御一行に拉致られ、屋上へと連れて行かれた。

「神は私を見放したッ！！！！」

「なに言つとるん？弁当冷めるで」

屋上ってなんか叫びたくなるよね。

「音耶君、こっちこっち」

高町が隣を開けながら手招きしている。

つつか、いつの間にか名前と呼ばれてる。

さすが魔王。図々しい。

しかし、まさか魔王御一行と食事を取るなんて…。

どんな地獄の晩餐会になるのだろう。

あ、昼食だから昼餐会？

とりあえず高町と海堂の間に座り、鼻歌を歌いながら弁当を取り出す。

「なんだか機嫌いいね、西野君」

「今日の弁当が楽しみでな」

今日は奮発した弁当を持ってきたため、気分は最高にいい俺は、弁当箱であるツッパを開いた。

「き〜み〜が〜あ〜よ〜〜は〜」

「って、日の丸弁当やないかつ！！」バシッ！！

いつの間にか後ろに移動していた八神が、ハリセンで叩いて来る。お前、絶対狙ってたろ。

「なあ、自分。なんでそんな弁当なんじゃ？」

「俺が日本国民だからさ。日本バンザイ」

「で、おかずは？」

スルーされた。

「家計が苦しいから、おかずなんて贅沢な物はない」

主に雪音の食費で。

可愛いから許すけど。

事実を言ったら、なんか皆が暖かい眼差しを向けてきた。
やめるよ…照れるじゃないか。

「音耶、私のおかずあげるよ」

フエイトから、から揚げを貰った。

つて、あんたも呼び捨てかい。

まあ、犬は飼い主に似るって言うしな。

「私のもお裾分けや」

八神からアスパラのベーコン巻きを貰った。
うむ、これは好きだぞ。

「わたしのも食べて」

月村から肉を貰った。

血肉にさせてもらおう。

「感謝しなさいよね」

アリサから、なんか黒いつぶつぶを貰った。
おそろくタピオカだろう。

「はい、音耶君」

高町から人参を貰った。

きつと、マンドラゴラだろう。

「ワシのも食ってなあ」

海堂から、食べかけのハンバーグを貰った。

「高町、あーん」

「へっ!?!あ、あーん…って、きゃあッ!?!」「パシンッ!?!」

ハンバーグは叩き落された。

「ワシのハンバアアアアアアアアゲッ!?!?!?!」

海堂が泣いた。

そんなこんなで続いた昼食は、ある者が現れる事によって終止符を打つ。

そいつは突然やってきた。

「なのはッ!?!?!」「バンッ!?!」

突然響く重低音。

発信源はドア。

「うっ、クレス君…!」

高町が嫌そうな顔をする。

その男は高町に近づくと、いきなり高町の手を握った。

「なのは！！良かった…無事だったんだね…」

「い、いきなり何？」

「なのはが暴行を受けたって聞いて心配したんだ！！頭がおかしくなりそうだったよ」

「へ、へえ、そう…」

「で、誰なんだい？なのはに暴行を加えたクズは！？」

「暴行なんてされてないよ…」

「そんな訳ないだろ！？こんなに目を腫らして…んっ、見ない顔がいるな」

半狂乱になって叫ぶ奴と目があつた。

やめて、そんなに見つめないで。

「んっんんっ！突然すまないね、君は？」

なんか人懐っこい笑みで見てくる。

今更遅いぞ。

「名乗る時は自分から。小学校で教わらなかったか？」

ピクツと、相手の眉が動いた気がする。

「そうだね、では名乗るよ。僕はクレス・レオンフォード、なのは達の幼馴染だよ」

金髪。

赤と青のオッドアイ。

クレス・レオンフォード。

僕…。

俺は優しくクレスの肩に手を置き、温かな目で見る。

「大丈夫。誰だって一度は通る道だから」

「…は？」

「金髪は染めたのかい？瞳もカラコン？偽名は出来るだけ隠したほうがいいよ。恥ずかしいから」

「き、君はいったい何が言いたい！！??」

言ってしまうのか？

しかし相手が望んでいるんだ。心苦しいが、ズバツと言ってあげよう。

「厨二は卒業しなさい」

「……ブフォツ」「」

アリサ、八神、海堂が吹いた。

笑うなよ、可哀想だろう。

「……き……」

お前ら酷いな。特に高町。
あいつだって頑張ってたぞ。

「き、きさまっ！！もう許さん！！！！！」

怒り狂った厨二は、胸元から青い宝石のついたペンダントを取り出した。

「なっ！？あれは不味いで！！！」

「レオンハート！！セットアツ」やめんかッ！！！！」ツチ！！離せ
！！！！！」

厨二が変身しようとするが、海棠に押さえつけられ、宝石を八神に奪われる。

てか、あれってデバイスだよな。

「悪いけど西野君。このバカと話があるから席を外してもらってもええか？すずかちゃんたちも」

「わかった、がんばれよ」

「おおきに。頑張って説教したるわ」

俺たちは屋上を後にした。

階段の踊り場でしばらく雑談していると、屋上のドアが開き厨二が降りてきた。

俺の前まで来ると、俺を睨み付けてきた。

「絶対に許さないからな」

いや、ハンバーグを装備して凄まれても……。厨二の間ではハンバーグが流行っているのか？

「てな事があつたんだ」

「おにいちゃん…大変」

「つつか兄貴、そいつデバイス持ってたの？」

俺は本日の出来事を、夕食時に話した。

あの後、八神達から謝られ、後は特に何もなく帰宅した。で、現在それを話している。

「ああ、レオンハートって厨二くせい名前だった」

「レオンハートって……兄貴！！もしかしてこの人か！？」

イガグリが服の中から雑誌を取り出す。
お前はヤクザにでも狙われているのか、イガグリ？

「兄貴これだよ！！これ！！」

「ふむ、どれどれ……最強の魔導師『クレス・レオンフォード』、
あいつミッドでも偽名なのか」

「やっぱりこの人！？かぁー！！！すげえ！！こんな近くにいたんだ！！」

「どんだけハイテンションなんだ、きもいぞイガグリ」

「だって最強だぜ！？俺、この人に憧れてんだ！！」

マジか。

頼むから厨二にならないでくれ。俺が恥ずかしい。

「つつかそれ、地球の雑誌じゃないよな？」

「ああ！！父さん達のお土産！！『月刊 魔導師』！！」

なんて分かりやすいタイトルなんだ。
つて、おいおい魔王も写ってるぞ。

「ああこれ？この人は今話題のエースだよ。地球出身なんだって！！」

「エース？魔王じゃないのか？」

「魔王？なに言ってるんの兄貴？」

「その人は見習っちゃだめだ。いつか、下僕Gって呼ばれるぞ」

「えー！？この人の砲撃に憧れてるのに」

「手遅れか…。雪音はいつまでも綺麗でいよつな」

「…うみゆ？」

胸が満腹です。

第3話 厚食。マジモんの厨二患者だ（後書き）

第4話 なまえをよんで。マジで名前なんだっけ？（前書き）

こんにちは、二足歩行犬です。

今回はかなりggggdになってしまいました。

あと、1話くらいいけるかな？

第4話 なまえをよんで。マジで名前なんだっけ？

新学年になり1週間。

あの日から、やたらと絡んでくる魔王御一行。

俺の精神は魔王の微笑みでどんどん擦り減っていく。

否、現在進行形で擦り減っている。

「わたし、音耶君のお弁当も作ってきたんだ。良かったら食べて」
「ニコニコ」

現在は昼休み。

場所最近、新たなテリトリーとして使っている屋上。

食事時は皆の顔が見えるように円になっている。

そして俺は海斗と高町の間が定位置とかしていた。

実に不満だ。意義を申し立てる。

「なのはちゃんの手作り弁当か。モテモテやな西野君」

「もう〜、そんなんじゃないよ〜はやてちゃん」

「なんか最近嬉しそうじゃのお〜、なのは嬢」

「あ、それ私も思った」

「食事（俺）を前にして喜んでるんだろ？」

「そんなに食いしん坊じゃないもんっ」

「じゃあ、何かいい事あったの？」

「うん！最近クレス君の顔を見ないんだっ」

クレス君？……ああ、厨二か。

つうか高町。お前何気にひどいな。

「うわっ、ハッキリ言うわねえ」

「なのはちゃん……」

見ろ、2人が若干引いてるぞ。

そこまで厨二が嫌いか、高町。

「そういえば音耶、今日はどんな弁当持って来たじゃ？」

「本日のメインディッシュは10秒チャージ」

「よし、なのはちゃんの弁当もらったとき」

「あ、そうだった！はい、音耶君」

高町から青い包みを渡された。

中々重量のある代物だ。

微かに焼いた肉の香りが漂う。

「ひだりへ受け流す~~~~~」

「おお！なのは嬢……ワシのために愛妻弁当を……」

「ちがうよっ！？それは音耶君の！」

「人肉は食えんとです」

「人肉！？ソーセージだよ、人肉じゃないの！！」

「ふむ、なら頂こう。海斗、お前に人間の食物はまだ早い」

俺は海斗から弁当を奪取した。

海斗は眉の下のダムが崩壊した。

「その…あまり美味しくないかも…」

「なに、人間の食い物なら食べる」

高町を横目に恐る恐る弁当を開く。

中身はミートボール、ソーセージ、卵焼き、ハム、レタス、プチトマト、フルーツと、意外と普通の弁当だった。

「UMAは出て来なかったか…」

「未確認生物扱い！？」

「しかし、何か可愛らしい弁当だな」

「あの、もしかして嫌だった…？」

「いや、正直助かる。死んでしまった豚に感謝して、いただきます」

「ピンポイントで豚かいな」

とりあえず、盛り付けたフルーツを一口。
ふむ、甘い。

「ちよつとあんた、普通デザート先に食べる？」

「甘いものはいちごミルク以外好かんのです」

「あつ、だからいつもダルそうなんだね」

「糖分不足って言いたいのか、このヤロー」

「音耶は嫌いなものは先に食べる派なんだね」

フエイト嬢は中々の観察眼を持っているようだ。

ふむ、では卵焼きを頂こう。

「……………甘くない」

「お父さんが甘い卵焼きは苦手なの。だから塩を入れたんだけど……でもちよつど良かった、音耶君は甘いもの苦手なんだもんね！」

「そこに直れ、このヤロー」

「ふえ？」

「いいか、甘くない卵焼きは卵焼きとは言えん。塩？アホかお前。卵焼きを辱めるのもいい加減にしろ」

「ええええええええ！？」

「なんやコイツ、めんどくさっ!！」

甘くない卵焼きなんぞ、俺は認めん。

「音耶、この前のアレどうじゃった？」

食事も終わり、今は雑談タイム。
海斗が俺に話しかけてきた。

「アレか…。意外と良かったな。まあ、M Y A n g e l には遠く及ばないが」

「そかそか、音耶はええ趣味してるのお」

「やめろよ、照れるじゃねえか」

「……あんたら、何の話しとるん？」

「なに…ってそりゃあ、…なあ？」

「あんたらホンマ仲ええな」

まあ、話が合うしな。

主にあっち方面で。

「そういえば、いつの間にか名前で呼びあってるしね」

「親友じゃからな!!」

「切っても切れない仲だ」

「ふ〜ん……ねえ西野」

「なんだアリサ？」

「あんだ、なんでなのは達は苗字で呼んでるの？」

何を言ってるんだコイツは？

いきなり名前で呼ぶとか失礼だろ。

常識を勉強しなさい。

「なんかムカつくわね……。でも、あたしやフェイトは名前じゃない」

「え？」

「え」

「名前なの？」

「そうよ、フェイト・T・ハラオウンにアリサ・バニングス。名前じゃない」

「……………」

「？」

「嘘だツツツツツツツツ！！！！！！！！！！」

「きゃあっ！！！」

「騙されんぞブルータス。お前の名前はバ…バ…バウイングだろ！！」

「バニングスよ！！それにバニングスはファミリーネームだわツ！！」

「ファミリーネームって……お前外人だったのか！？」

「ハーフよ！ハーフ！！金髪見れば分かるでしょ、普通！！」

「いや、てっきり厨二病患者かグれてるだけだと……」

「あんだ…殺すわよ」

おー、怖い怖い。

しかし、まさかハーフだったとは。

最近、原作知識が無くなってきたな。

「じゃあバニング」はあ、アリサでいいわよ「…んじゃ、アリサ」

「なあ、もしかして西野君って私達の名前知らん？」

「なにを言う、早見優。これでも記憶力には自身あり」

「ネタが古いわ！！……じゃあ、私の名前言ってみ？」

「八神狸だろ？」

「たぬツ！？ちやうわー！八神はやてや、は・や・てー！！」

「借金執事か……」

「あ、あれおもしろいな」

「ああ、俺も好きだぞ」

「って、名前違いやー！！」

うるさい狸だ。

カチカチ山再現すつぞ、このヤロー。

「もうええわ……。それじゃあ、すずかちゃんのフルネームは？」

「お前アホだな、自分で言ってるぞ。月村・すずか・チャン、だろ？」

「……アンタも相当アホやな」

「私は月村すずかだよ……」

「おk。記憶完了」

最近の名前はややこしいのが多いからな。
覚えるのも大変だ。

「音耶、私の名前は？」

「ああ、フェイトか…。お前の名前はインプットされてる。いい名だからな」

「え！？そ…そう？ありがとう」

何故赤くなる？

事実を言っただけだぞ。

「性がフェイト、名がテストロッサ、字がハラオウンだろ？珍しいよな、今の時代まだ字を持つてるなんて」

「……………??？」

「フェイトは中国人じゃないわよ…」

フェイトは良くわからないみたいだ。

アリサはさすが優等生。

憧れも痺れもしねえけど。

「冗談だ、気にするな。フェイトのフルネームはアレだろ、Fat e / t e s u t a r o s s a h a r a o u n d だろ？」

「あ、うん。なんか違う気がするけどそれでいいよ」

「ちなみに私はバーサーカーが好きや」

「わたしはライダーかな？」

「ワシは兄貴や」

「お前らやるな。俺はアーチャー一筋。今度、はやてん家でバトロ
うぜ」

「おお、ええで。つてあんた、私の名前…」

「類友だからな。てなわけでよろしく、はやてとすずか」

「うん、よろしく」

「よろしゅう」

俺は仲間をゲットした。

いつか魔王の元から開放してあげよう。
と、クイクイっと俺の服を引っ張る何かがいる。

「あの、わたしも名前…」

「魔王だろ？」

「魔王じゃないよ!？」

いやいや、お前が魔王じゃなかったら誰が魔王なんだよ。
お前はラスボスだろ？
よくRPGに出てくるだろ？

「音耶君…わたしのフルネームわかる？」

「わかるに決まってんだろ。何年一緒にいたと思うんだ」

「1週間や」

「音耶君…」

「魔界脊策魔物門脊椎魔物亜門人肉食網魔人目魔王科戦闘民属、高町なのはだろ？」

「なんか違うの!？」

「あんたって実は頭いいでしょ…」

「いってよりは、頭の回転が速いだけなのかもね」

「ねえ、わたしも名前でごんごん？」

「わかったよ、魔界脊「なのは」……魔お「なのは」……m「なのは」……」

なんだろう、高町の目から光がなくなっている。遂に本性を現したか。

ここで選択肢を間違えるとBAD END直行だな。俺は…

1・素直に名前と呼ぶ。

2・バトルを挑む。

3・魔法の呪文

4・脱ぐ

ふむ、とりあえず2は捨てるか。

勝てるわけないし。

4…は、社会的に死ぬな。

後は1と3か…。

なら選ぶほうは決まっている。

「高町…確かにお前は強い…」

「けどなあ！！僕にだって守りたい世界があるんだッ！！！！！」

「何言ってるの？」

「行くぞ！！俺の魔法の呪文を喰らえ！！！！！」

「え！？魔法やて！？」

「なのは！！逃げて！！！」

「すずか嬢！アリサ嬢！ワシのそばから離れるな！！！」

「え！？ちょっとどういふことっ！？」

「まさか西野君も！！！？」

「これで俺は最強となる…さよならだ高町…」

俺は右手を前に突き出し、左手を右手首に添えた。

高町はどうやら混乱しているようだ。

「行くぞッ！！！！！」

「「「「「なのは(ちゃん)(嬢)……!」「「「「「「

「ゆづて いみや おうきむ 「うほ りいゆ じじとり やまめ
きぢらッペッペッペッペッペッペッペッペッペッペッペッペッ
ッペッペッペッペッ!……!……!……!」

「「「「「へ?」「「「「「

なんか皆、面食らった顔をしている。
なんでやねん。

「これで俺のレベルは48だ。最後まで抗わせてもらっ

「あ、あの…音耶?」

「俺は音耶ではない。もよもとだ!……」

「じゃあ、もよもと。今のなに?」

「復活の呪文だ」

「復活の…呪文?」

「知らないのか?」

俺は驚き、フェイトへと身体ごと振り返る。
アレを知らないなんて。
これだから現代っ子は…。

俺が時代の変化について考察していると、突然背後から強烈な寒気が襲ってきた。

「ねえ…音耶君…」

振り向いちゃだめだ！振り向いちゃだめだ！振り向いちゃだめだ
ッ！！！！

しかし、振り向いてしまうのが人間の性。
後ろには目が逝ってる魔王がいたとです。

「音耶君…なまえをよんで…」

ドクンッ！！

な、なんだ！？この胸の鼓動は！？

身体は全身鳥肌なのに、心が熱くなっっていくだと！？

まさか…恋？

次週『真剣で魔王に恋しなさい！！』

なんてね。

こんな状況でも、冗談を言える俺の心はきつと鋼で出来ていた。

「ねえ？音耶君…？」

「…なんだ？」

「なまえを…よんで？」

「だが断」 「なまえをよんで」 …いッ 「なまえをよんで」 …k 「な
まえをよんで」 …神は私を見放したッ！！！！」

「さあ、なまえをよんで？」

「……なの……」

「聞こえないよ？もっと大きな声で……」

「な……なの……」

「うん、あと少し……」

「なのっ」

「なの？」

「ナノインパクト……！」

後の俺は言った。

弁当箱は鈍器にもなる。よい子は真似しないでね。

「なあ、因みにワシの名前は？」

「何言ってるんだ？お前には名前なんてないだろ」

「……え？」

第5話 翠屋。マジ笑えない(前書き)

今回は、突撃翠屋!!

さよなら、音耶君…。

君はきつと死ぬ。

第5話 翠屋。マジ笑えない

『喫茶 翠屋』

別名 戦闘民族の巣窟。

数々の人間を破壊、蹂躪してきた戦闘民族の村。

「あそこだけは近づいてはならん……近づくと引き込まれるぞ……
ああ…わしの妻も…あやつらに…クツ…ばああああああああああ
ああああああああんツ!!!!!!」

つて、じいちゃんも言ってた。

近づいたら死。

そんな場所に俺はいた。

俺も好きでいるわけではない。

あれは昨夜のことだった…

〈回想・昨夜〉

「さてイガグリよ、雪音は寝たか？」

「ああ、今は寢床でぐっすりさ」

場所は海鳴市に存在する一軒の家。

そののリビングで今、重大な会議が起ころうとしていた。

出席者は二名。

真っ暗なりビングではテーブルの上に置いたケータイだけが、妖し

い光を放っていた。

「さて、イガグリよ。今回の議題…わかっておるな？」

碇ポーズで尋ねる俺に、イガグリも碇ポーズで答えた。

「ああ、明日の事だろ？」

「ふっ、分かっているではないか。そう、明日は……」

「『雪音、初めてハイハイしました記念日』」

「って、やっぱり必要なのこれ？」

イガグリは立ち上がり、リビングの電気をつける。

秀囲気は大事だと教えたはずだが？

ちっ、これだから野郎は。

「で、兄貴。明日の記念日って必要なの？」

「当たり前だろう。妹が成長を遂げたという素晴らしい記念日。家族なら当然祝うだろ」

「俺のは無いんだけど……」

「野郎は知らん」

何言ってるの、このイガグリ。

お前がハイハイできたくらいで祝わんわ。

「で、イガグリ。問題はプレゼントを何にするかだ」

「やっぱり食べ物じゃない？」

「それには同感だ」

「あ…：そういうば、姉ちゃんがこの前言ってたんだけど…」

「k w s k」

「なんか、翠屋ってこのケーキが食べたいって言ってたよ」

「ふむ、ケーキか…：祝いの場にはぴったりだな。しかも雪音が御所望ときた。決まりだな、今年のプレゼントはケーキだ…！」

「じゃあ、兄貴買って来て。俺は出前頼みまくるから」

「よし、では今回の議事を閉幕する…！」

〈回想終了〉

「ミスった。あの時、気づいていれば」

俺が思い出したのは、ここに着いてからだった。

俺としたことが…：なんてミスを。

しかしなんだ？結構、普通の喫茶店だな。
はっ！？騙されるな。

これはきつと罠だ。

平凡を装いながら店内は謝肉祭、酒池肉林、人肉取引…。
クソッ！！さすが魔王の家族。汚いぜ。

しかし俺は行かなければならない。雪音のために。

絶対ケーキを持って帰るからな。

たとえ四肢が無くなるうとも。

だから、俺を見守っていてくれ雪音。

いざ……出陣！！！！！！

「いらっしゃいましたー！！」

むっ、意外と挨拶も普通だな。

てつきり「ギャキュウヒョアガヒヒヒッキシャー……………
！！！！」かと思った。

「お一人様ですか？」

なんかメガネが話しかけてきた。

しかも疑問系。

お前には、俺のほかにも人が見えるのか？

「1人です」

「かしこまりました。カウンター席でよろしいですか？」

「はい」

「ではこちらにどうぞ」

通されたのはカウンター席のど真ん中。
なんとなく辺りを見回す。

店内には俺以外の客がいない。
店内に1人って、ちよつと優越感。

「いらつしゃい」

と、店の奥から若い男が出てきた。
この人は覚えてるぞ、土郎さんだろ？

「ちわつす」

「今日は一人かい？」

「ええ、まあ」

「そういえば、その制服。ウチの娘と同じ学校なんだね」

来ると思ったよ、その質問。
しかし面倒な事に巻き込まれたくないので、ここは他人のふりをしよう。

「へー、そうなんすか？偶然ですねー」

「ははっ、そうだね。それで、ご注文は？」

「コーヒー、ブラックで」

「おっ、渋いね。少々お待ちは」

「甘いもんは苦手っすから」

「そうか。そういえばうちの娘、高町なのはって言うんだけど知らないかな？」

「聞いたことはありますね。なんでも聖祥五大美女だとか」

「ほう、そんな噂をされているのか。はい、コーヒー」

「ども、……………うまいっすね。こんなの生まれて初めてだ」

「そりゃあ、ありがと」

マジでうまい。おそらく今までで一番。なんか、ここの店に通いたくなる味だ。

「そういえば君……………名前は？」

「阪東っす」

ここで本名を出すほどバカじゃない。呪術に使われんのもやだしな。

「阪東君に聞きたい事があるんだけど、いいかな？」

「なんなりと」

「君……西野音耶君って知らない？」

「知りません。聞いた事ありません。妖怪かなんかですか？」

「人間だよ。最近娘が事あるごとに、音耶君音耶君と話していてね。この前なんか手作り弁当を渡したみたいだよ。はははっ」

「土郎さん、笑いながらグラスを握り締めないでください。ヒビ入ってますよ。」

「こりゃあ、さっさと用事を済ませるべきか。バレたら挽肉にされそうだしな。」

「マスター、お土産用にケーキ20個包んで貰えます？」

「20個！？凄い量だね……」

「うちには大食いがいるんで」

「そうか……。種類は？」

「適当にお願いします」

俺がそういうと、土郎さんは奥に消えていった。

とりあえずサムズアップしました。

「…え！？お父さん、まずくないって！！」

「良かったな、美由希」

ほのぼのしんじやねえよ。

こっちは地獄との瀬戸際だったの。

さすが、高町家。

やる事が汚い。

「…クソッ…甘えよ…甘すぎるよ…」

「お、お父さん！！私のケーキが涙を！！」

「……よかったな、美由希」

ごめん雪音…。

兄ちゃんは逝くよ…。

「クフオ〜…しよっぺえ…甘じよっぺ〜よ…」

「しよっぺいのは君の涙だ」

先程から、約30分。

俺の死闘はまだ続いていた。

半分残るケーキを見て、更に涙が溢れ出す。

もう…ゴールしていいよね…。

と、その時…死にそうな俺に、天の声と地獄行き決定の音が聞こえた。

「ちい…す…!」

「ただいま、おとうさん」

「「こんにちは」

「おかえり。海斗君とフェイトちゃんとアリサちゃん、いらっしやい」

魔王御一行が帰ってきた。

「ってあれ？音耶君！？来てたんだ!!」

「……音耶…君…?」

俺、終了の合図。

「って、こいつ泣きながらケーキ食べてるわ!？」

「どっしたの、音耶!？」

「うばおおおおおおおおおお」

「すまん。何言ってるかさっぱりわからん」

「なにになに？ケーキが甘い、死んじゃう？」

「分かるんか！？フェイト嬢！？」

「え？分からないの？」

「普通わかんないわよ」

いいから助けてお。

俺が助けを求めていると、高町がケーキのホイップを指で掬い取り舐めた。

「甘っ！？おとうさん！！これ凄く甘いよ！！？」

「やっぱりか…」

「おとうさん、まさか味見は？」

「すまん、する勇気がなかった」

「もう！！大丈夫、音耶君！？」

「ぼおおおおおおお」

「えっと…じいちゃんが手を振ってる…」

「音耶君！？死んじゃだめえ！！」

こうして俺は死……なずに開放してもらえた。
この時だけ、高町が天使に見えた。
この時だけ。
大事な事なので2回言った。
ちなみに、ケーキは高町印のゴミ箱へ消えた。

「うっ、ごめんなさい……」

メガネが頭を下げてくる。

本当に申し訳なさそうに謝っている。

「だが許さない」

「ええ!?!」

「冗談だ。しかし高町、助かった。あのままだったらきつと、地獄
行きの片道切符を買ったところだった」

「こっちこそごめんね。2人が変な物食べさせちゃって……」

「ああ、私からも謝罪するよ」

「いえ、別にもういいですって」

さて、色々あって少し長居しすぎたかな。
そろそろ帰るとするか。

「じゃあ、俺は帰るんで」

そう言つてを背を向けると、何故かガシツされた。
犯人は……あなたですね、土郎さん。

「少し君と話があるんだ…西野音耶君」

「俺はありません」

「はははっ、私にはあるんだよ」

「あなたは俺に、細菌兵器入りケーキを食べさせました」

「それはすまなかつたね。けどそれとこれとは、話は別だ」

俺は首根っこを掴まれ、引きずられてく。

高町と目があった。

助けを呼んだ。

「なまえをよんで」

ま・た・そ・れ・か。

しかし、背に腹は変えられない。

オーケー、取引成立だ。

「行けなのは！！滅びのバーストストリーム！！」

「それはできないの」

あっ、引つ張る力が強く。

もう無理ぽ…。

なんとか助かった俺は、ケーキを受け取り帰宅した。

ケーキを雪音に渡したら、凄く喜んでくれた。

兄ちゃん冥利に尽きる。

後日、俺は高熱を出し寝込んだ。

やはり、あのケーキは兵器だった。

第5話 翠屋。マジ笑えない(後書き)

士郎さんってこんな感じだったけ？

うん、よくわからん。

第6話 学力テスト。マジで語ろう(前書き)

まさか、もう1話仕上げてしまった…!!

がんばった俺。しかし明日学校。

電車で一時間…。

どうして遠い大学選んだんだろう…。

今回は長くなるので、2つに訳増した。

しかも今回の前編は、異常に会話が多いです。

第6話 学力テスト。マジで語るう

五月。

梅雨の季節。

または、うつ病増加の季節。

新しい環境に疲れた者たちがダメになる季節。

ここ、聖祥中学の生徒も例外ではなかった。

「鬱や……死のう……」

「鬱じゃあ……死のう……」

「鬱なの……死ぬの……」

「なのはが死ぬなら死のう……」

「……なんだこれ……」

いつもどおりの朝。

学校へ登校すると教室がホラーと化していた。

多くの生徒がテーブルに突っ伏し、死ぬ死ぬ連呼している。

魔法少女3人とアホも鬱っていた。

うつ病の感染率は高いらしい。覚えておこう。

「で？どういいう状況だこれは？」

俺は後ろのほうで呆れた顔をしているアリサと、心配そうな顔をしているはずかのもとへ向かった。

「あっ、おはよう、音耶君」

「おはよう、音耶。見ての通りよ」

「見て分からないから聞いてるんだが？」

「うつ病に罹ったらしいのよ」

「うつ病？いつも、はな垂れ坊主のように元気なこいつらが？」

「音耶君、いいすぎだよ」

「すずかに注意された。」

「しかし魔王までも罹るとは意外だ。何があつた？聖水でも浴びたのか？」

「原因はあれみたいよ」

「アリサの指差す先には、一枚のプリント。『第1回 学力テスト』と書いてあつた。なるほど。アレのせいか。」

「うつ、絶対赤点なの……」

「歴史が……」

「全部やばいわ……」

「右に同じじゃあ……」

「休みすぎだ。お前達が悪い」

そう。こいつらは良く休む。

理由は知ってるが、俺には関係ナッシング。

管理局に入ったお前らが悪い。

海斗については知らんが、おそらくコイツも管理局員だろう。

「すずかちゃん、助けて〜」

「自業自得なのに人に縋るとか。その図々しさに脱帽」

「いいよ、勉強見てあげる」

「すずかの人の良さにも脱帽」

「ありがとう〜!!すずかちゃん!!」

「はあ、仕方がないわね…。あなた達!!今週の日曜は図書館で勉強よ!!」

どうやらこいつ等は休日も勉強するらしい。

やる気のある奴らだ。

敬意をはらってこの言葉を贈ろう。

「ガンバツツ!!!!」

「あんたも参加ね」

何故だ。

時は過ぎ日曜日。

場所は図書館、自習室。

幸い俺達以外に、人はいないようなので存分くつろげる。

「さて、お前達。パーティーステーションポータブル、略してPS Pは持ってきたか？デビルハンターやるぞ。爆弾の貯蔵は十分か？」

「って、なんでアンタはゲーム持ってきてんのよ!!」

「あ、アリサちゃん……実はわたしも……」

「すすかまで!?!」

さすが類とも。

図書館でやることを良くわかっている。

「俺とすすかは狩りに行ってくるから、お前ら勉強な。なに悔しがるな、これが平民と貴族の違いさ」

「いいからあんたも手伝いなさいよ」

「だが断る。さあ、すすか、狩りの時間だ」

「ごめんね、わたし勉強見てあげないと」

「お前もかあああああああつ、ブルウウウウウウタアアアアアアアアスツ！！！！！」

「うっさいッ！！！！」「ドゴッ！！！」

理不尽だ。

「なあ、そういえば音耶君は勉強しなくてええんか？そんな頭良くないんやろ？」

「1人寂しくPSPをピコっていたら、狸が聞き捨てならないことを言いやがった。」

「はん？頭が悪い？現代のピカソと言われた、この俺が？」

「いや、それ芸術家やから」

「ふむ、俺に向かって頭が悪いと言った狸に問題だ」

「……頭かち割ったるか？」

「トウルンツ！！問題、鎌倉幕府はいつ出来たか？」

「1185年やる？簡単や」

「え？」

「え？」

「お…おう、正解」

「あんたも勉強追加」

何故だ。

「うう、歴史がまったく分からない…」

勉強会に追加され30分。

フェイトが音をあげた。

忍耐力の無い子。お前は忠犬のはずだろ？

八千公見習えや。

「記憶するだけだろ？」

「それが出来れば苦労しないんだけど…」

「そういえば自分の好きなものに例えると、覚えやすいつて聞いた

で？試しにほら、本能寺の変を想像してみ」

「本当？えっと…私の好きなもの……」

（フェイトの愉快的な頭の中）

巨大な寺の前に、馬に跨ったある男がいた。
名は海堂海斗。
後に有名となる武将である。

「皆のもの！！敵は本能寺にあり！！行くぞッ！！！！」

海斗の一声で大勢の兵が、本能寺を包み込もうとした。

「……クソっ……ここまでなの……」

燃え盛る寺の中、1人の女が今窮地に立たされていた。

「まさか海斗君が……ここまでやるなんて……」

思い浮かぶは彼が部下だった時の記憶。

しかしそれも過去。

今は現実を見なければ。

だが、現状は変わらない。自分はきつと殺されるだろう。

「しかしこの、高町なのは……決して敵になど殺されないのッ……」

「良かった、無事で、なのは、なのは!?!」

「一体なんなの~~~~!!」

「アホだな」

フェイトは正気を取り戻すと、顔を真っ赤にして海斗に謝った。

海斗は「ええんじゃ」と言っつてフェイトを撫でた。

次の瞬間、海斗は宙を待っていた。

不思議だ…。

ナデポならぬナデゴツ!!か？

色々あつたが勉強会は再開された。

俺はなのはと勉強していたが、なぜかアリサに追い出された。

アリサ曰く「あんたがいると、なのはが集中できないの。ほら、バカ2人に混じつて勉強してなさい」

理不尽だ。

「そういう訳で、この部署へ配属された、西野音耶軍曹であります」

「よう来たな、音耶軍曹。私は部隊長の副官をとる、八神はやて少佐や」

「そしてワシは部隊長の、海堂海斗大佐じゃ」

「よろしくおねがいます」

「ふむ、さっそくじゃが、この部署についての説明をする。八神少佐」

「はい。この部署は、女体に関する考察を主に担当しております。世界には様々な女体が存在しますが、我々は数ある女体の内、どれがいかに素晴らしい女体なのかを選定するために、設立された部署であります」

「ふむ、ご苦労じゃ。理解できたかの軍曹？」

「はっ！私は素晴らしい部署に配属されたのですね」

「ええ、ここより上はあらへんよ」

「では、さっそく今回の議題を発表する。今回は『巨乳の素晴らしい女体について』じゃ」

「意義ありッ！ー！」

「ふむ、発言を許す」

「はっ、巨乳の輝きなどほんの一瞬。言わば流れ星のような物。将来は垂れます！」

「意義あり！」

「発言を許す」

「その一瞬の輝きが、美しいのではあらへんのか？確かに垂れるかもしれないけど、それは昔、輝いていた証拠です。なので私は巨乳を推します」

「はんっ！将来垂れる物になんの意味がある」

「……何が言いたいんや、軍曹？」

「私はペチャを推します」

「何を言う、揉めない乳などに意味はあらへん！！」

「垂れるよりはいい！！」

「静粛にッ！……ここはもめる場ではないぞ？」

「すみません」

「ふむ、では軍曹の意見から聞こうかの」

「はい。私はあくまで巨乳を否定します。巨乳など、少女には不釣り合いです」

「ふむ、しかし今はそういう需要もあるのдар？」

「それは堕ちた者たちの意見です。彼らは忘れてしまっている、少女はナイチチという教えを…」

「ひとつええですか？」

「なんじゃ、八神少佐」

「先程から少女と言つ言葉を耳にしますが、まさか軍曹はロリコンですか？」

「なッ！？ロリコンって言うやつがロリコンなんだッ！！」

「図星のようやね。音耶軍曹はロリコンと…」

「違う！！あくまで父性本能だ！！」

「ほお。……軍曹、取引せえへんか？」

「取引？……何ですか？」

「我が家にはヴィータっちゅう娘がいる。軍曹の好きなロリロリや」

「ふんっ、それがどうしました？」

「しかもツンデレ属性。私にはデレるんやけど、そらぁ可愛ええで」

「なっ…っ、ツンデレロリ…だと？」

「ああ、しかもその娘はちょっと特別でなあ、なんと……エターナルや」

「!?!???……おお、神は存在したのか…」

「どや、会ってみたいか？」

「ふふっ、負けたよ少佐。取引成立だ」

「あんがとうな、軍曹」

「しかし、何故そこまで巨乳を？」

「乳は私にとって全てなんや…」

「素晴らしい…そこまで…」

「いや、あなたのペチャに対する気持ちもよう伝わったわ。これからは手を取り合おうやないか」

「はっ、どこまでも着いて行きます少佐!！」

「うむ、決まったようじゃのお。では、判決『乳に上下関係なし! ! 全て平等! !』じゃ」

「」「異議なし」

「うむうむ、ではこれで議k「あんた達……何してる訳?」「つく!
総員撤退!」ワシもn「何処行くの?海斗君」す、すずか嬢……」

「あかん!!部隊長が捕まった!!はよ逃げ」「はやて、逃げちゃ
だめだよ」「ふえ、フエイトちゃん……」

「八神少佐ツ!!」

「来たらあかん!!軍曹は逃げえっ!!そして、世界に乳の良さを
!!……!!」

「く、くそおおおおおッ!!!!」

「頑張つてな、軍曹。私は世界中の乳を愛し、そして、世界をト」
「なに言ってるの?はやて」ちょ、辞書はあかんてっ!フエイトちゃ
ん!!!!」

「ありがとう少佐。あなたのお陰で大切なものに気づけた。だから、
俺は貴方の想いを世界にツ!!!!??」

「何処行くつもりなのかな?音耶君」

「魔王か……。しかも目に光が灯っていない。バーサーカーモードか
……最悪だな……」

「魔王じゃないの。なのはだよ」

「悪いがここは通らせもらうぞ。少佐の想いを無駄には、ツグハア
……」

「逃がさないわよ……」

「辞書は反則だろ……って、お前は！？魔王の配下、四天王が1人、
金髪緑眼炎の守り手、アリサ・バーニング!?」

「……………」

「ふっ、どうやらここまでみたいだな……。すみません少佐……。約束
……守りませんでした……」

「 H A N A S H I よ (な の) ……」

この日、3人の命が散った。

しかし彼らの想いは、きつと誰かの胸に残っているだろう。

続く!!!!!!

第6話 学力テスト。マジで語ろう(後書き)

音耶君はロリコンのようです(笑)

本人は否定してますけどwwww

しかし、今回の話の後半。

はやてと海斗と音耶で、凄くやりたかった話なんですよね。

ちなみに作者はロリコンではありません。

第7話 学力テスト2。マジでやればモーマンタイ（前書き）

今回は後編です。

書くのに1時間半かった…。

一日一話が限界かな？

頑張れば二話行けるかも。

第7話 学力テスト2。マジでやればモーマントイ

海鳴市の惨劇から早1時間。

時刻は昼。

俺たちは某ファミレスへと来ていた。

ファミレスはいいよ。安いしくつろげる。

「のう音耶、ワシがピンポン押してええかの？」

隣に座る海斗がガキっぽいことを言ってきた。

因みに席は4人がけ席をドッキングさせた、簡易8人席だ。

席順は窓側が、海斗、俺、はやて

通路側はフェイト、なのは、すずか、アリサとなっている。

で、話を戻すが海斗が実に子供っぽい事を言ってきた。

ピンポン…それを押せば店員が駆けつけて来るといふ、画期的な機械。

幼稚園児、小学校低学年に絶大な人気を誇るボタンだ。

しかし、俺たちは中学生。

そんなボタンなど興味ないわ。

「と、引き下がる俺ではない。ピンポンは俺が押す」

「嫌じゃ、ワシが押す」

「黙れ。そのボタンはお前にはまだ早い」

「嫌じゃ!!!ワシが押す!!!」

「ダメだ、俺が押す」

「ワシじゃ!!!」

「俺だ」

ピンポン

「「あ」

「あ、あれ？もしかして押しちゃだめだった？」

「いや、ナイスよフェイト」

「ボタン一つで恥ずかしいの」

俺たちが聖なるピンポンを取り合っていると、あることが金髪忠犬フェイ公が押しやがった。

「~~~~!!フェイト嬢のバカッツ!!」

「きつとお前の心はヘドロで出来ていた。そして泣くなバカ、きもい」

「そういう音耶君も、目に水が溜まってるで」

「いや、これは心のあゝ」おまたせしました。ご注文はお決まりですか?」喋ってる途中に入ってくるとか。いったいどうゆう教育をされてる、店員?」

くそっ、ちょっと可愛いからって許されると思っな。
ドリンクバー制覇すっぞ、このヤロー。

「すみません、こいつらは気にしなくていいです」

「は、はぁ」

「えっと、ドリンクバー7つ。あたしは、たらこスパゲティです
ずかは？」

「わたしも同じものを」

「私は日替わりランチお願いします」

「私はサンドイッチで。なのはは？」

「わたしは、おろしハンバーグで。あとランチセットBお願いしま
す」

「そちらのハンバーグは人肉ですが、よろしいでしょうか？」

「はい…って、何言ってるの!?!音耶君!?!」

「はい、って言ったよこの人。あ、俺リブステーキ、ランチセット
Aで」

「か、かしこまりました。…あと、当店は牛肉ですので…」

「そんなこと分かっている。ジョークも分からのか?今時の店員

「は

「す、すみません!」

「あの、本当にこいつは気にしないでください…」

「は、はい。」注文は以上でよろしいでしょうか?

「はい、お願いs」ワシがまだじゃ!」「いたのか虫」

「虫!?!まあええわ。ワシはえびグラタン。えびとマカロニ抜きで」

お前も帰れ。

「ええよ、なのはちゃん達のも持って来るわ」

さすがはやて、良くわかつてる。
アリサとは大違いだ。

「ありがとう、はやてちゃん。わたしはコーラお願い」

「私もコーラで」

「わたしは紅茶をお願いしていいかな？」

「俺はk「わかつた、ほな行って来るわ」お前もか、少佐」

信じてたのに裏切つたな、少佐。
仕方ない、行って来るか。

「おい虫。おまえのも持ってきてやる」

「まじか？なんじゃ、音耶最高じゃな…。目頭が熱くなってきたわ
…」

「親友だろ？で、何にするんだ？」

「親友……。なんでもええわ…親友の持ってきたもんなら何でも飲
んじやるツ！！」

「任せろ。心を籠めて注いできてやる」

こうして俺はドリバコーナーに向かった。

親友のためだ、一肌脱ぐか！！

「で、なんじゃこれ？」

「ミックスジュースだ」

俺は親友のために頑張った。

親友の目の前には、七色に光る飲み物が置いてある。
これを作っていた時は、周囲の目が凄く痛かった。

「色々ミックスしすぎじゃろ！！」

「ミックスジュースだからな」

「うわぁ…さすがにやりすぎなの」

魔王御一行は可哀想な眼差しを、海斗に向けている。

「お前、親友の作ったもんなら飲むって言ったよな？」

「け、けど…これはあかんで」

「飲むよな？」

「くう…ええけん！！飲んじゃるわ！！」

海斗はグラスを勢い良く持ち上げ、立ち上がった。
やる気だな、こいつ。

そんなお前に、敬意を籠めてこの言葉を贈ろう。

「お前にレインボー……！！」

「あ、あれ名作やな」

海斗は逝った。

その後は普通に食事を取り、再び図書館自習室。
海斗？

ご想像にお任せします。

「ねえ、アリサちゃん。ここ分らないけど…」

「ああ、ここは…」

「すずか、ちょっといいかな？」

「うん」

「すずかちゃん、私もええか？」

「……………」

皆、黙々と勉強をしている。

さすがに危機感が湧いたか？

1人だけ顔色がゾンビになっているが。

しかし、あれだな。

人が真面目に何かをやっている時って、邪魔したくなるよな？
なるだろ？

よし、邪魔しよう。

（音耶inアリサ&なのはコーナー）

「捗ってるか？」

「音耶君。うん、まちまちかな」

「あなた、何しに来たのよ？邪魔するなら、あっち行ってなさい」

「失敬な奴だな。俺も手伝いに着たんだよ」

ふむ、なのはは国語が苦手か。

日本人として恥だな。

「俺も国語は得意だ。なんでも聞いてくれ」

「ありがとう。じゃあ、この文の尊敬語の部分なんだけど……」

「孫・圭吾？」

「え、うん。尊敬語」

孫・圭吾？

中国人か？いや、圭吾は日本人だよな。

孫はきつと、三国時代に活躍した孫家のことだよな。

じゃあ、圭吾は？

やっぱり日本人だよな……。

孫…三国時代…日本人…圭吾…

…はッ！？まさか……。

よし、答えは導き出された……。

「なのは、答えがわかった」

「本当？教えてもらってもいい？」

「ああ……。孫・圭吾…三国時代に呉軍で活躍した武将で、孫家の1人。孫権の弟であり、日本人とのハーフ。享年37歳。若くして病でこの世を去った、悲劇の武将……。わかったか？」

「意味わかんないわよッ！！！！」

追い出されました。

何故だ。

「音耶innすずか&フェイト&はやてコーナー」

「ういゝす」

「……何しにきたん？」

なんだ、その帰れって目は？

俺は邪魔などせんよ。

「ああ、お前達に勉強を教えにきた。アリサとなのはには好評だったぞ？」

「ほんまか？アリサちゃんの怒声が聞こえた気がするんやけど…」

「怒声じゃない喜声だ」

「音耶、ここ分かる？」

フェイトが見せてきたのは、社会の教科書だった。

『第一次世界大戦』

戦争か？けど、第一次？

第二次が最初じゃないの？

けど、一っつついてるしな…。

知られざる戦争ってことか…。

「ふむ〜…」

「やっぱり、わからない？」

「ん〜…戦争…第一次…知られざる戦争…はッ!？」

「わかったんか？」

「…第一次…聖杯戦争…」

「なんやて!？」

「え?あ、あれ？」

「聖杯戦争がどうかしたの？」

「すずかか…。聞いてくれ、過去に第一次聖杯戦争が行われていたらしい…」

「えっ!？」

「まさか、現実で行われていたんか…」

「じゃあ、時期的にそろそろ第五次聖杯戦争が?…」

「ああ…、既に始まっているかもしれない…」

「「ッ!？」」

「ね、ねえ…三人は何話してるの？」

「すまん…フェイトちゃん。今は勉強どころの話やないんや」

「そうだね、戦いは既に始まってるとだよ…」

「それで？2人はこれからどないするん？」

「俺は遠坂家に行く。アーチャーに無限の剣製を習いたい」

「わたしは桜ちゃんの所かな？助けてあげたいし」

「私はイリヤの所や。バーサーカーの漢気に惚れた」

「全員別々か…」

「悲しいね…」

「仕方あらへん…。これも聖杯のためや…」

「ッ！？見る！！海斗が！！！」

「なッ！？海斗君！！！」

「生氣を感じられない…。まさか…キヤスターが？」

「柳桐寺か！キヤスターめ…！」

「皆、予定変更や。柳桐寺に行くで」

「うん、海斗君の仇を…」

「ああ、よし！柳桐寺に行くぞ！！キャスター、海斗のk」ガッ！！
なんか、ガッ！！された。

後ろを向いてはいけない気がする。
けれど向いてしまうのが人の性。

「おお…まさかアリサ…、お前がアヴェンジャーだったとはな…」

片手に何故か俺のバックを持った、アリサもといアヴェンジャーがいた。

笑顔だが眉がピクってるぞ。

「だが捕まるわけには行かぬ。俺は海t「あんた、もう帰れ」意義を申し立てる」

帰されますた。
何故だ。

時は過ぎ、月曜日。

今日は学力テスト。

勉強を頑張った奴が報われる日。

「さて、今日は学力テストよ。皆、気合入れなさい！」

ホームルームで担任の三十路が話している。

と、なぜかフェイトが手を挙げた。

「どうしたの？ハラオウンさん？」

「あの…海斗が来てないんですけど…」

そういえばいないな。

なんだ？昨日のミックスジュースで腹でも壊したか？

「ああ、海堂君ね。海堂君は昨日、急性胃腸炎で倒れたらしいわよ。3日ほど入院だって。皆も気をつけさい！」

ま・じ・か。

そして、テスト返却日。
俺たちは放課後、翠屋に来ていた。
士郎さんは意外と俺に対して普通だった。
別にブルってた訳じゃねえよ？

席に着きケーキやら飲み物を頼んだ。
俺は勿論コーヒーだけ。

「さて、テストの結果を発表し合うわよ!!」

ケーキや飲み物が運ばれた後、アリサが今回集まった目的を口にした。
因みに海斗は復活し、後日テストを受けた。

「あたしは平均92点!!赤点は勿論なしよ!!」

「……お〜!」「」「」

「じゃあ次はわたしだね。平均91点。アリサちゃんに負けちゃったな」

「……お〜!」「」「」

「次は私だね。平均70点、赤点は回避できたよ。ありがとう、すずか」

「うん。おめでとうフェイトちゃん」

アリサがニヤニヤしながら聞いてくる。
俺が赤点だらけだと思っているな。
しかし甘い！甘すぎるよアリサ君！！

「ほら、高貴なる点数だ」

俺は鞆から答案用紙を取り出し、机に放り投げる。
理科の答案用紙が、海斗のケーキに刺さったが気にしない。

「えっと…国語98点!？」

「数学100点なの!？」

「社会は98点!？」

「英語は88点や!」

「理科は96点じゃ…化け物じゃ!！」

「えっと…平均96点っ!すごいね、音耶君」

「どうせ中学生程度の問題。真面目にやればモーマンタイ」

俺の一言で何人かが崩れ落ちた。
中卒とは違うのだよ、中卒とは。

第7話 学力テスト？。マジでやればモーマンタイ（後書き）

意外と頭が良い音耶君。

所詮、中学生の問題だから。

これが高校の問題になると、おそらく赤点があります。

そして海斗。ドンマイッ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0912z/>

魔法少女とかマジ笑える

2011年12月5日19時55分発行